
ヒナゲシの華

水無月奎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナゲシの華

【Nコード】

N5189Z

【作者名】

水無月奎

【あらすじ】

ヒナゲシさんには同い年の従姉妹がいます。似通った名前のヒナコちゃん。しかし似て非なるもので、顔が違う、スタイルも違う、性格も違っていて、まさに我が人生は比較に始まり比較に終わる。いや、仕方ないんですけどね、現実はいつだってシビアで物語のよくな甘い展開はありえなくてーあれ、目から汗が。減った、今確実に心の中の何かが減った。そんなヒナゲシの十三からの人生です。あまじょっぱいよ！

彼女にはファンタジックに生きてもらおうと思っています。

似て非なるヒナ（前書き）

さてさて、物語の始まり始まり。

似て非なるヒナ

悲劇は、外から見ると喜劇に見えることがある。

対岸の火事であれば、何事もなく平和に滞りなく進むストーリーより、キヤストが四苦八苦していることこそが面白い。

その苦悩する様が、涙する顔が、激昂するのが嬉しいのだと。

他人とは得てしてそんなものなのだ。

などと悟りきつた冒頭を語る私、名をヒナゲシという。漢字は雛罌粟なのだが、素直にこれが書けるだろうか。いや、書けまい。

というわけで、だーれも漢字を思い浮かべて私の名を呼ばないため、ヒナゲシなのだ。

そんなヒナゲシさんが、何人生悟りきつちやった枯れた台詞呟いてんの、ってな話だが、今現在悲劇真っ只中だからである。他人には面白くて仕方ない類いの。

ヒナゲシは農耕して生計を立てているちっちゃな村の小娘なのだが、まるつきり同じ年の従姉妹がいる。名をヒナコ。

この村で年齢がびつたり同じなのは二人だけ。2〜3離れた上と下の娘さんもいるが、十三なのは二人だけ。

親も姉妹とくるから、何かと比較されて生きている。

その比較こそが悲劇。他人から見れば喜劇。ちくしょう、運命を呪いたい。

ヒナコとヒナゲシ、という響きは似ているのだが、顔面とスタイルと漢字まで『似て非なるもの』、という言葉がピッタリと当てはまる上に見られる側はいい。〜より可愛いね、〜より似合うね、〜より好きだなあって褒められフィーバーだ。

が、下に見られる方からしてみたら。くより可愛くない、くと同じように出来ないの？、くだったら良かったのに、と。まるで存在するのが悪かのように言われまくる人生をひっ被らされるのだ。詰んでる。人生詰んでるよね。この先の人生全て見えた気分だ。

これが母の語る物語ならば、こんな器量悪しの娘にも一途に想ってくれる男というものが存在するわけだが。

人生、そんなに都合良くはいかない。現実はいつだってシビアだ。初恋以降全ての恋心を踏みにじられ続けた私は、既に悟りきっている。まともな恋愛はもう諦めよう、と。

きつといつかあぶれた男性と見合い婚だ。それも嫌がられるなら、一生独り。あつ、泣いてないから。これ、ただの汗だから。

大人たちの心ない言葉はもうグツサグサとヒナゲシの心を突き刺している。その上で成り立った性格だ。もう清い心のあの頃には戻れない。人生、諦めが肝心である。

どんな台詞にもめげない鉄の心。傷ついた表情など、周りを喜ばせるだけ。そういうわけで、今のヒナゲシは完成している。親も遠い目をする、時々。

「ヒナちゃん！」

いかにも女の子らしい、甲高い声が響く。村を見下ろせる位置で突っ立っていた私は、顔を上げた。

「ヒナコ」

無垢な笑顔全開で走り寄ってきたのは、話題のヒナコさんだった。遠目から見ても可愛い。軽く死にたくなった。

「もう、ヒナちゃんつたら！すぐに居なくなるの良くないよ！」

いや、お前こそ何故にすぐ真横に並びたがるのか。おかげさんで比較しやすく、ますます私は悪し様に言われるのである。
そんな事よりも。

ヒナコの背後に目を移し、うんざりとした。また増えている。

「後ろの男ども、また増えてんじゃん。何で連れてくるかな…」

十三ではあるが、十分女の子らしい可愛さがあるヒナコは、村中の男をもれなく骨抜きにした。その射程範囲は十代に留まらず、二十代三十代にも及ぶ。ロリコン野郎が多過ぎて死にたくなる。

逆ハーレムというものらしい。縁のない言葉だったが、ヒナコが身近にいることで、嫌でも野郎どもの醜い争いを間近で見続けるはめになった。

「それにヒナって呼ぶのやめて。それ、あんたのことだから。むしろ村中の共通認識だから」

それをあえて私に使うのだから、嫌がらせなのかと言いたくなる。あつちのヒナちゃんとは可愛いけど、こつちのヒナちゃんは、ねえ…？なんて大人たちに言われてみやがれ。確実に何かが減るぞ。

「いいじゃない、ヒナちゃんと私しか、ヒナっていないんだよ」

うん、貴様が考えなしなのはわかった。ありがとう、君の無邪気でより一層傷つけられてます私。

背後に並ぶロリコンどものうつとり顔も吐き気に繋がる。私の体調不良は貴様らのせいだ。死ねよほんと。

「ねえヒナちゃん、今度の収穫祭で歌と踊りを披露するの」

「ぜってえー嫌だ」

「まだ言い切つてないのに」

何が言いたいのかは瞬時に把握した。

この幼馴染は、本気で理解してないのかと突き詰めたくなるほど、私を同じ舞台に立たそうとする。それがどんな悲劇を引き起こすか知らないで。

歌と踊り？こいつと一緒にやってみやがれ。ますます格差社会が生まれるじゃないの。主に私とヒナコの間。

何でお前いんの？と怪訝な視線を集める晴れの舞台での羞恥プレイは一度で十分だ。そこに思い至らなかった過去の自分も抹殺してしまいたい。

ヒナコとヒナゲシさん。二人一緒に赴けば、お呼びでないと叫びたげな怪訝な顔をされる辛さがご理解いただけるだろうか。

何でここに居るの？何で？

これほど人を傷つける視線があるだろうか。奴らは覚えてなかつたが、私は過去の一つ一つ覚えている。簡単に許せるわけがない。とどのつまりは孤立してるってことなんだけど。死にたいです。

「ヒナコが一人で歌って踊ればいい。どうせみんなが見たいのはヒナコ一人なんだから」

さあ、と気持ちの良い風が吹き、目を細める。ここで居眠りしたらさぞかし気持ちが良いだろうが、そろそろ夕飯の支度がある。

「じゃーね」

求められるヒナコと求められないヒナゲシ。

求められない存在は、どこへ行けば良いのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189z/>

ヒナゲシの華

2011年12月17日18時55分発行